

## 参 考 図 書 紹 介

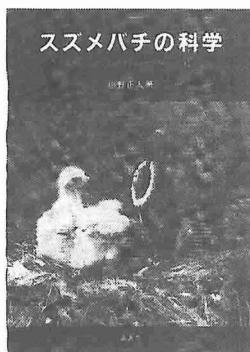
### スズメバチの科学

小野 正人, 海游舎. pp.174. 1997. 2,700円 (税別). ISBN4-905930-56-1.

スズメバチの顔をじっと見ているとこのハチは我々と同じ知能を持ち、ヒトよりもずっと思慮深い営みをしているように思えてならない。

この疑問を見事に解きあかし、さらに神秘の底に引きずり込んでくれるのが本書である。著者のこのハチにける情熱と愛情がひしひしと伝わってくる。

内容は9項目からなっているが特に章を立てるといった堅苦しいものでなく、本邦産のスズメバチの仲間の紹介に始まって、一番ページを割いて書かれているその生活史の詳細な記述に続き、他のスズメバチの巣を乗っ取る珍種チャイロスズメバチの生態や、一般の人ではまずお目にかかれぬハチの寄生虫であるカギバラバチやネジレバネの貴重な生態の記録、巣を掘らなければ見つけられない巣の掃除屋であるニトベッコウハナアブやクシヒゲハネカクシの生態など貴重な記録が盛り込まれている。さらには、ヒトとの関わり合いから刺されないため



のスズメバチ対策、巣の採り方、ハチと共存できる環境生態学まで至れり尽くせりである。

玉川大学ミツバチ科学研究所(現研究施設)の初代の創設者、岡田一次先生以来の伝統であろうか、ここに豊富に掲載されている写真がまた素晴らしい。これを書評の第一に書きたいくらいである。表紙カバーは宮崎学氏撮影のハチクマが雛にハチの子を与えている場面、裏カバーはセイヨウミツバチを襲うオオスズメバチの写真で、まず本を手にとってみる人を釘づけにする。中の写真を追えばスズメバチが正確に語られ、何よりも忠実にこの昆虫のあるがままを見せてくれる。これも長年に亘る著者の真摯な観察力の賜物であろう。

文章は平易に書かれており、巻末には専門用語の解説があるので高校生以上の自然科学に興味を持つ学生さんのみならず、一般の人にも気楽に読める natural history の本として最適であろう。一方、この本は文中随所に専門の参考文献の引用があり、内容的にも専門書としての資格を立派に備えているので、今の時代に対応する科学書の新たな試みとしてこのスタイルは高く評価されてよいだろう。早く英訳本が出てこの優れた研究が世界に紹介されることを願っているのは私だけではない。

(中嶋 暉躬)

### ミツバチ—飼育・生産の実際と蜜源植物—

角田 公次. 1997. (社)農山漁村文化協会(新特産シリーズ). pp. 173. 1,600円 (税別) ISBN: 4-540-96116-0

ミツバチ飼育の入門書として長い間利用されていた中野茂著の「特産シリーズ ミツバチ—生態と飼い方—」が絶版となって久しい中、同じ農文協から改訂新版として発行された新特産シリーズの一冊である。35年間、養蜂家としての経験を基にした内容は、第1章で述べられて

いる魅力あふれるミツバチと養蜂についての問いかけを感じさせる本である。これからミツバチを飼ってみようとする人を対象にしているだけあって、第2章では種蜂の購入、蜂場の設置場所、服装や



## 参 考 図 書 紹 介

蜂具などの導入までの基礎知識、第3章では女王蜂の操作、分蜂の防ぎ方、群勢の維持、病気・害敵などのハチミツ生産に向けた管理法、第4章では年間を通した蜜源植物の基礎知識、第5章では養蜂生産物について、それぞれ分かりやすく解説されている。しかし、記述の中に「蜜囊の中でショ糖を分解」、「働き蜂は腋の下からロウを分泌」、出房までの日数を「雄蜂が19日」、「ホルモン(フェロモンともいう)」などの大きな誤りが目に付くのは残念である。ま

た初めてミツバチを飼う場合に最も気になる点は蜂群管理であるが、著者の体験から、内検の前に「巣箱を軽くトントンとたたいてから蓋を開ける」とある表現は、蜜不足の時などその刺激で攻撃的になる場合もあり、問題であると思われる。砂糖液の作り方についても「1斗カンに砂糖10キロ」と1~2群から飼育を開始する際には、余りにも多い量であり、砂糖とお湯を1:1で溶かすなど、初心者向けの配慮が欲しかった。(吉田 忠晴)

## 国 際 ミ ツ バ チ 研 究 協 会



### 雑誌紹介

**Bee World 78 巻2号 (1997)** には5編の論文が寄せられている。

1989年5月と1993年4月の2回にわたってパキスタンを訪れたCraneは「インダス川流域地方やその近辺におけるコミツバチの養蜂」という論文を寄せている。この地方は砂漠に囲まれており、ミツバチはコミツバチ一種しか生息していない。「養蜂家」たちはこの蜂の小さな一枚巣を維持して蜜圈のみを収穫したり、流蜜期に大きな植物群落のそばへ巣を集めてきて設置することで蜜を集めさせたりしているのだという。

Dung et al. は「ベトナムにおける化学物質を使わないダニ類の防除の実際」と題しベトナムで養蜂家が利用して効果を上げている生物学的防除の手法を紹介している。それによれば、巣板の一部あるいは1枚全部を雄巣房にし、その巣房にミツバチヘギイタダニを集めて取り去ったり、女王蜂の更新時もしくは流蜜期に、女王蜂と蜂児を操作することで一時的に無蜂児

期間を作り出すことでミツバチトゲダニを、またその直後に作られた蜂児圏を蓋掛け直後にすべて取り去ることで、そこに集まったミツバチヘギイタダニを完全に防除できるようである。

Goodwin は「砂糖水給餌によるポリネーション効率の改善について」と題した総説を寄稿している。

**Bee World 78 巻3号 (1997)** には5編の論文が寄せられている。

Crane は「貯蜜性昆虫を利用しない植物からの甘味の収穫」と題して、ハチミツ以外の甘味を人間がどのようにして植物から集めてきたのかについての総説を寄稿している。ハチミツと果物以外の甘味を大きく花蜜、甘露(アブラムシの排出液)、マナ(甘露の乾燥したものなど)、樹液(サトウキビやサトウカエデの樹液、ヤシの花蜜など)に分け、それぞれについてどの国の住民がどのように利用しているのかを詳しく述べている。

Youhua は「中国南部におけるトウヨウミツバチの冬季主要蜜源植物フカノキ」と題して、興味深い蜜源植物であるフカノキをくわしく紹介している。

またLakshmi and Suryanarayana は「ジンガムノキ」と題して東南アジアとアフリカに分布しインド乾燥林の主要構成木であり街路樹